「何ができるのか分からない」から始まったロボット実証

2026.03.26 取材

相模原市での実証を現場で担った平本氏に聞く、手探りから始まったプロジェクトとその実感

何ができるのか分からないまま、現場は動き始めた

今回の実証は、何をどこまでやるべきかも分からない状態から、始まりました。
戸田建設との連携をきっかけに、市役所内で実証がスタートしましたが、当初は用途も明確ではなく、正直なところ、手探りの連続でした。
自分の中でもイメージがつかないまま、進めるしかなく、プロジェクトの進め方も含めて、迷いながらの立ち上げだったと感じています。
周囲の方々に助けてもらいながら進める中で、迷惑をかけてしまったのではないか、と感じる場面もありました。
それでも、現場で動かし続けることで、少しずつ形になっていきました。

置くだけでは使われないと、現場で実感した

ロボットが実際に動き始めると、職員や来庁者から、さまざまな意見が集まりました。
「こういう使い方ができるのではないか」という声が出てきて、現場の中で、少しずつ使い方が見えてきました。
導入して強く感じたのは、「置くだけでは使われない」ということです。
日常の業務の中で関わり続けなければ、ロボットは活用されないまま、終わってしまうと感じました。
現場で触りながら調整していく中で、初めて、使い方が育っていくものだと実感しました。

ロボットは、現場の中で育っていくものだった

今回の運用では、職員自身がロボットの動きを考え、実際に触りながら、調整する場面もありました。
一からすべてを作ることは難しいですが、用意された仕組みを使いながら試していくことで、「こうしたい」という形に、近づけることができました。
ロボットは完成されたものを導入するというよりも、現場の中で、一緒に育てていくものだと感じています。
今回の経験を通じて、ロボット導入の本質は、技術そのものではなく、「現場がどう変わるか」にあると実感しました。
Buddiotteのように、現場で実際に触りながら使えるツールがあったことは、進めていく上で、大きな助けになりました。

ロボットやAIも、誰かが作ったものを使うだけではなく、現場で扱う人が主体となって、関わっていくことが大切だと思っています。
今回の経験を踏まえて、現場で本当に使われる形にしていくことに、関わっていきたいと考えています。

PROFILE

平本 健悟 Kengo Hiramoto

相模原市 産業支援雇用対策課

民間企業での生産技術職を経て現職。ロボット導入支援や実証事業に従事。

「導入するだけでは意味がない。現場が使いこなせてこそ価値になると感じています」